

Th 北海道・北東北 第6回 知事サミット

期日/平成14年8月23日(金)

場所/秋田県小坂町「小坂鉱山事務所」

23.2002



第6回北海道・北東北知事サミット

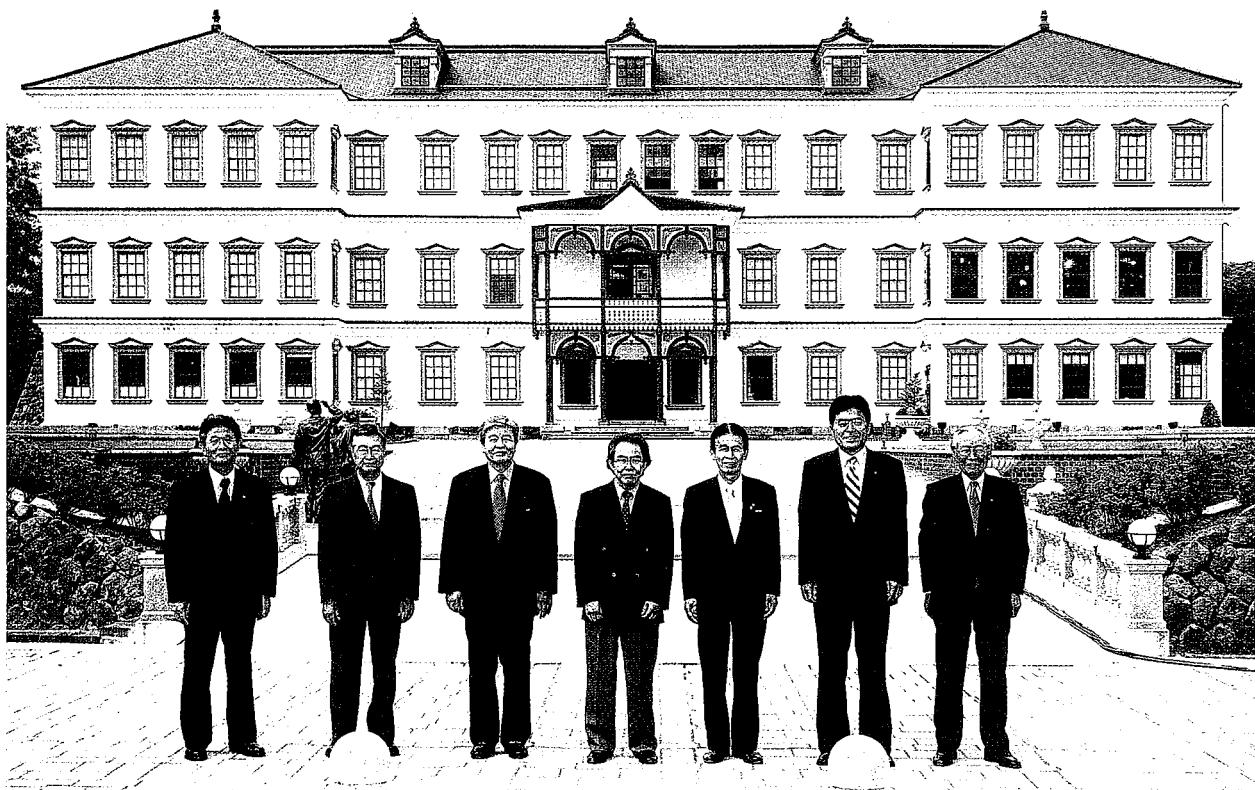
テーマ 「21世紀型の健康」

期 日 平成14年8月23日（金）

会 場 秋田県鹿角郡小坂町 小坂鉱山事務所

目 次

はじめに	1
開催概要	2
出席者・ゲスト紹介	3
ゲストとの意見交換	5
今回の合意事項	24
これまでのサミットの経過及び合意事項	29



はじめに

北海道・北東北知事サミットは、北海道、青森県、岩手県、秋田県の知事が集まり、広域的な問題など共通する行政課題について意見交換を行い、相互の連携や交流を深めて、北海道・北東北の発展につなげることを目的に開催されています。

平成9年度の第1回から第4回までは北東北3県の知事により開催されてきましたが、第5回目からは北海道知事をメンバーに加えての開催となりました。

第6回目となる今回のサミットは、平成14年8月23日、秋田県鹿角郡小坂町「小坂鉱山事務所」に3名のゲストをお招きし、「21世紀型の健康」をテーマに熱心な意見交換が行われました。

また、意見交換終了後、4道県知事は、そろって記者会見に臨み、今後連携して取り組む合意事項を発表しました。

この冊子は、ゲストの方々との意見交換の内容とサミットの成果として発表された合意事項をとりまとめたものです。

第6回北海道・北東北知事サミット開催概要

1 開催趣旨

北海道、青森県、岩手県及び秋田県の4道県知事が一堂に会し、共通の政策課題等について意見交換を行うことにより、相互の連携及び交流の一層の促進を図り、もって本地域の発展に資することを目的とする。

2 名 称 「第6回北海道・北東北知事サミット」

3 日 時 平成14年8月23日（金）

4 会 場 秋田県鹿角郡小坂町 小坂鉱山事務所

5 テーマ 「21世紀型の健康」

6 出席者

知 事	ゲ ス ト
北海道知事 堀 達也	青森県立保健大学副学長 吉岡 利忠
青森県知事 木村 守男	岩手医科大学歯学部教授 田中 久敏
岩手県知事 増田 寛也	秋田県立脳血管研究センター所長
秋田県知事 寺田 典城	安井 信之

7 日程概略

- 11:00～12:00 知事協議
12:00～13:15 昼食、ゲストとの懇談、記念撮影
13:15～15:00 ゲストとの意見交換 ※インターネットライブ中継
15:00～15:15 知事協議
15:15～15:45 共同記者会見、合意事項公表 ※インターネットライブ中継

8 意見交換の骨子

ゆとりや豊かさ、あるいは自然の恵みなどから得られる心身の充実までを含む、新しい意味での健康、すなわち「21世紀型の健康」の在り方について、広い視野から意見交換する。

なお、意見交換の内容を踏まえ、各道県が連携して取り組む事項について取りまとめ、公表する。

出席者紹介



■北海道知事 堀 達也（ほり たつや）

昭和10年北海道生まれ。昭和33年北海道大学農学部卒、同年北海道入庁。平成3年北海道公営企業管理者、平成5年北海道副知事。平成7年から現職、現在2期目。



■青森県知事 木村 守男（きむら もりお）

昭和13年青森県生まれ。昭和35年日本大学法学部卒、昭和37年建設大臣河野一郎秘書。昭和42年青森県県議会議員（3期）、昭和55年衆議院議員（4期）、平成5年農林水産政務次官。平成7年から現職、現在2期目。



■岩手県知事 増田 寛也（ますだ ひろや）

昭和26年東京都生まれ。昭和52年東京大学法学部卒、同年建設省入省。平成6年建設省建設経済局建設業課紛争調整官。平成7年から現職、現在2期目。

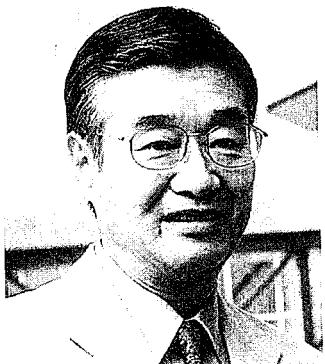


■秋田県知事 寺田 典城（てらた すけしろ）

昭和15年秋田県生まれ。昭和40年早稲田大学法学部卒。昭和42年創和建設（株）代表取締役社長。平成3年横手市長（2期）。平成9年から現職、現在2期目。

ゲスト紹介

■吉岡利忠（よしおかとしだ）青森県立保健大学副学長、医学博士



昭和18年青森県弘前市出身。昭和43年東京慈恵会医科大学卒業。東海大学医学部助教授、ペンシルベニア大学医学部助教授、聖マリアンナ医科大学教授を経て、平成11年から現職。日本宇宙航空環境医学会、日本体力医学会等の理事、日本運動生理学会理事長、神奈川県体育協会スポーツ医学委員会委員長など歴任。専門研究分野は、スポーツ医科学、宇宙医学、生活習慣病、疲労と休養の科学、健康科学などで、関連する著書、論文多数。趣味は、絵画鑑賞、ラジオ体操、ウォーキング、スキー、邦楽清元。

■田中久敏（たなか



ひさとし）岩手医科大学歯学部教授、歯学博士

昭和10年長崎県佐世保市出身。昭和36年九州歯科大学卒業。その後オハイオ州立大学歯学部大学院終了、同大学助教授、ワシントン大学(St. Louis)有床補綴学講座 Chairman & 準教授を経て、岩手医科大学歯学部教授。昭和58年～61年まで岩手医科大学歯学部病院院長。日本補綴歯科学会理事、日本補綴学会会長、日本歯科医学会常任理事など歴任。専門研究分野は、歯科補綴学、顎口腔機能学、歯科心身医学。主な著書に「ハウチャーコンプリートデンチャー」「Teledyne System 咬合器機構とその臨床」「咬合のメイテンナンス」など。趣味は、ゴルフ。

■安井信之（やすい



のぶゆき）秋田県立脳血管研究センター所長、医学博士

昭和20年京都府出身。昭和48年関西医科大学大学院卒業。同大学脳神経外科助手を経て、秋田県立脳血管研究センターへ。センター脳神経外科学研究部研究員、脳神経外科学研究部長、研究局長、副病院長、副所長を経て、平成12年4月から現職。日本脳神経外科学会、日本脳循環代謝学会の評議員、日本脳卒中学会、脳神経外科手術と機器学会の運営委員など。脳卒中関連論文、著書多数。趣味は、美術鑑賞。

ゲストのみなさんと意見交換



【寺田知事】

本日は各知事さん、そしてゲストの皆さん、この秋田県小坂町までお忙しいところお越しくださいまして、誠にありがとうございました。心から歓迎申し上げます。

この会場（小坂鉱山事務所）と隣の康楽館は、国の重要文化財に指定されている施設でございます。

小坂町を少しご紹介させていただきますと、明治30年には電気が引かれ、38年には上水道が整備されて、水と電気はただただたそうです。当時の人口が約2万人位で、秋田市が3万人だったそうですから、いかにこの町が栄えていたかということがございます。その他に医療機関として東北帝大の附属病院に次ぐ水準の総合病院があったというような歴史があるところです。

面白い話では、明治の頃のアメリカの小学校の世界史の教科書には、東北に関してここ小坂と仙台しか記載がなかったということがあります。

今現在は、人口7千人位ですが、鉱山技術の蓄積を生かしたりサイクル産業を新たな事業として展開しています。

さて、今日は、「健康」ということがテーマでございます。皆さんから忌憚のない意見を伺いたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

【司会】

それでは本日ご出席の方々を改めてご紹介したいと思います。

寺田知事の隣から北海道の堀知事でございます。その隣が青森県の木村知事でございます。その隣が岩手県の増田知事。その隣が青森県立保健大学

の吉岡副学長でございます。その隣が岩手医科大学歯学部の田中教授でございます。最後に秋田県立脳血管研究センターの安井所長でございます。

それでは、これから意見交換に入りますが、これからは開催県の寺田知事に進行をお願いして進めてまいります。終了時刻は14時55分を予定しております。それではよろしくお願ひいたします。

【寺田知事】

第6回目のサミットとなるわけですが、今回のテーマは「21世紀型の健康」とさせていただきました。21世紀の健康づくりはどうあるべきかが主題でございます。

まずは、出席いただきましたゲストの方々から、吉岡先生、田中先生、安井先生という順序で、自己紹介を含めて2、3分程度お話をお願ひいたします。

【吉岡副学長】

今日はお招きいただきましてありがとうございます。私は基礎医学の研究を続けてまいりまして、特に筋肉骨格筋、これは体の50%以上を占めているものなのですが、その形態や収縮機能の研究を続けてきました。

まず、筋肉が関係するものといいますとスポーツや運動です。さらに、スポーツによる健康の維持とかそういったことの研究も進めてきております。今日は健康ということでこの席に呼ばれておりますが、いかにしたら充実した生活を進めていいけるかというと、それには健康であることが最も大切です。私どもの研究から、筋肉の動きをどういう具合にして維持し機能をアップしていくら良いのかといったことをお話出来るかと思います。

【田中教授】

今日はお招きいただきましてありがとうございます

ました。私は歯科という立場から21世紀の健康についてお話をさせていただくことになっております。

歯科補綴学というのは大変難しい名前ですが、物の欠けたところを綴り補うということで、歯の喪失した人達の咀嚼機能回復を主に治療する立場でございます。

一般的に食事がうまくできるということはごく当たり前のことあって、歯科と健康との関わりは、消化不良をおこして胃腸病になるといったものでしたが高齢社会を迎え、特に噛むことと成人病の予防、脳の活性化、老化の防止との関連に大きな関心が集まりつつあります。また、高齢者の生きがいと大いに関連があるだろうという多くの研究がでてきました。

今回、21世紀型の健康について歯科の立場から発言させていただけるということは大変有意義なことではないかと思い、心より感謝申し上げます。

我が国における平均寿命は80歳を超えることが普通になっておりますが、80歳で口の中に歯が何本残っているのかということを考えると、平均5本から6本でございます。80歳の人で5人に1人は「入れ歯」を入れているのではないかと思います。この歯の喪失の度合いや入れ歯の具合と全身健康との関連は、歯がなく、趣味のない人に老人性痴呆、または寝たきり老人が多いという疫学的調査からして、歯科と21世紀型の健康とは大きな関わりがあると思います。または「入れ歯」の具合の良否といったものが全身健康に大きく関わっております。地域社会における健康には、歯科を除いて語るものはないのではないかと自負しております。

【安井所長】

私は京都の出身で秋田には1979年にやってまいりました。

秋田県に県立の脳血管研究センターが設立され

ましたのは1968年ですが、その当時、秋田県は脳卒中の死亡率が日本一という状況でこれを何とか克服しようという目的で設立されました。私は研究員としてこのセンターに勉強にやってきましたが、あつという間に23年が経ってしまいました。

秋田から参加ということで、秋田について感想を述べさせていただきます。秋田にいますと、生活や時間の流れに余裕がある、豊かさがあると実感しています。それはこれから健康を考える上で、非常に大事なことだと思いつつ、それは何故だろうと考えるわけですが、一人ひとりが自分のまわりに持っている空気が広いということだと私は理解しております。

街中を歩いていますと、一人ひとりのまわりに余裕がありますし、居住空間もそうだと思います。ラッシュアワーは秋田にもありますが、勤務に1時間もかかることはまずありません。これはどうといったことではないかもしれません、いわゆる大都会にない豊かさですし、自然環境に恵まれた北海道、北東北は日本で最も豊かな地域だと思います。一方、広さということは過疎につながつてしまい、この問題はますます大きくなっていくとは思いますが、人間が健康であるためにはその土地で経済的に自立して生活できることが必要条件となります。

如何にして、そのような環境を作り上げていくのかがこの地域にとってますます重要となります。自然環境からすると、はるかに東北、秋田よりも厳しい北欧が自然環境を生かしながら生活の高いレベルを維持していることを考えますと、十分可能と思います。

豊かな自然環境を生かすために、この地域に住む全ての人達が知恵を出し合って、これを生かした健康な社会を作っていくのに役立てていきたいと思いますが、そういった立場から今日はお話をさせていただきたいと思っております。

【寺田知事】

吉岡先生からは筋力の維持、また田中先生から噛むことでのボケ予防、安井先生からは自然豊かなこの地域でどのようなことが出来るかという話題が出されました。各知事からは、ご自身の健康づくりについて、日頃どのような生活を送っているかということを含めまして、お話を伺いたいと思います。

【堀知事】

その前に、昨年に引き続きましてこのサミットに参加させていただきまして、この間、3県の知事さんには色々な面で大変お世話になりました。この場を借りて厚くお礼を申し上げたいと思います。4月には札幌で4道県のシンポジウムを開催できました。「分権時代の地域戦略」をテーマに充実した議論ができたということで、改めて地域ブロックとしての連携の重要性というものを認識しているわけであります。

歴史、文化、地勢的に共通性のある北東北とは、今後とも関係を深めていきたいと思いますし、今日のテーマであります21世紀型の健康という面から見ても、食生活など、この気候風土みたいなところもありますし、東北の皆さんのが北海道へ移り住んだという歴史的なことを考えますと、食生活にはかなり共通の部分があるだろうと思っています。そういう意味では私どもも、これからもともに21世紀の文化ということについて、真剣に取り組んでいかなければならないと思っております。

私の健康づくりということについて言えば、私は大変不精者であります。知事になる前はかなり乱暴な生活をしていたのですが、知事になってから少しは摂生をしなければならないということで、心がけております。

一つは、食事を三度キチッとする。しかも、腹一杯食べないで七分目か八分目位にしておくとい

うことを心がけているということが一つ。

それと、私は米大好き人間でありまして、米を多く食べることがむしろ健康のもとになるのではないかと思っております。大体、ご飯は1日2食は必ず食べるということあります。その辺が私の健康づくりです。

反省すれば、もっと朝早起きして散歩をしたり、ちょっと運動をすればよいのですが、不精者ですからむしろ食べ物で健康管理をするといったことかと思います。

いずれにしても、国民の健康、あるいは道民の健康ということについては、色々な面で不安を感じているという報告もあります。その背景には、食生活の変化とか、あるいはストレスの度合いとか生活習慣病の増加といったことがあるのではないかと思いますが、こうした中で健康を考えるとき食というのは大変重要な要素です。

中国では「医食同源」といった言葉もあります。食生活が健康のもとであるというふうに言われております。

自分が住んでいる土地、そしてその季節で採れた旬の食べ物が心身の健康をつくるという意味の「身土不二」という言葉がありますが、こうした考え方は消費者と生産者が互いに支え合うことを目指す「地産地消」という考え方方に合い通ずる所もありますので、是非、地域の持っている「食」の力というものを21世紀の地域の健康づくりに大いに出していくべきだと思います。

【寺田知事】

堀知事は摂生をなさっているということで、スリムな体ですが、木村知事もすごくスリムな体で健康的ですね。

【木村知事】

6時間以上寝ないようにし、体を動かすことを基本にしています。スポーツをやる時間とか、朝

ジョギングをやる時間がなかなか無いので運動不足になりますから、県庁や陳情に行った役所でもエスカレーターとエレベーターを使わずに、階段を一段飛びして歩いています。ですから、足腰は強いです。

食生活からいくと、好き嫌いはないですね。リンゴを1日皮のままで丸かじりで3個食べておりまし、歯も良いし、消化も良いのか、風邪気味とかで医者に診てもらって簡単にすむし、胃の検査、血液検査、心電図をしても成人病を指摘されたことはないです。

お酒をあまり飲めなかったので、お酒を飲まない人はデータ的に過尿と言われたり、コーヒーを飲むと体に悪いのかと思いきやコーヒーを飲まない人は痴呆になりやすくて60歳になってから言われたり。もっと前に教えてくれれば良いと思いながら、これから飲んでも間に合わないかと心配しているのですが、一生懸命コーヒーを飲んで、お酒も少しあたしなむようになりました。

お酒は秋田のお酒がおいしいといいますが、青森県もおいしいし、岩手県もおいしいですので、北東北三県が合体するともっとおいしいお酒が作れると楽しみにしています。

ただ、ため息の出る点が、乳幼児の死亡率が高いこと。これは弱い赤ちゃんを産むということに原因の一つがありますが、お母さん達には産むときには、たばこを休んで欲しいと思います。また、私たちの北国は寒いから冬、運動不足になるせいか、塩分を取りやすいので、減塩運動をやっています。

そんなことで私たちも努力しています。リンゴを食べて、好き嫌いをせず、昆布とニンニクを食べて、長芋を食べて、極めてバランスが良い。そしてこの地域は、豊かな自然、澄んだ空気がある、おいしい水がある。健康に適した食料安定供給地域の中で、秋田の知事さんが健康をテーマに選んだということは、21世紀の新たなスタートとしては、

素晴らしいことだと思います。

健康づくりに三県と北海道で取り組み、健康のメッカは北海道、北東北三県なんだと、そういうふた環境の中でスポーツをやる。スポーツに親しみスポーツに強い立県宣言を青森県ではしています。障害者にもスポーツをしてほしい。そのようなことで頑張っていきたいと思っております。

【寺田知事】

どうもありがとうございました。木村知事は良く体を動かす、6時間以上は寝ないということでしたが、増田知事からもひとつお願いします。

【増田知事】

一つは食べ物ですね。知事になる前は健康について何も関心も持たずに、油っこいものを食べたりして、全然気にしていませんでした。昔は夜型で夜遅くまで仕事をしたり、時には仕事をしていると称して酒を飲んでいたり、また朝は時間ぎりぎりまで寝ていて、もうろうとしたまま職場に行くという生活だったのですが、今は完全に朝型の生活に変わって、朝ご飯をしっかりと食べています。しかも食べる物も、栄養価の高い豆腐などをたくさん食べるようにしたり、出来るだけ季節季節の旬の物をとるようにし、今の時期は自宅の庭で作っている新鮮なキュウリを食べたりしています。今はたばこを吸わなくなりましたが、夜の食生活は不規則になります。仕事柄、酒はどうしても飲まなければなりませんので、以前は宴会みたいなものに2時間から3時間、あるいは二次会等に行ったりしていましたが、今は全くそういうことはありません。軽く飲んだとしても時間の無駄のような気がしまして、あまり遅くならないうちに寝るようにしていて、最低6時間から7時間は寝ます。

人からは寝る時間もない程忙しくて、仕事や議会の最中に寝ているのではないかと言われること

がありますが、きちんと睡眠はとるようにしています。

健康づくりで大事なことは、食事をきちんととることと、睡眠をとること、そして後は何と言つても身体を動かすことですね。私も出来るだけエレベーターやエスカレーターを使わないように心がけています。普段の運動はその程度で、土曜とか日曜の空いている時間には、昔はゴルフなんかやったりしていましたが、今は年に1、2回になってしまってあまりやろうとも思わなくなりまして、最近では自転車や馬に乗ったりしています。

出来るだけ外で楽しく、しかも岩手でないとなかなか出来ないものをやろうと思っていますし、出来るだけ歩くようにもしています。これは体にも良いのだと思いますが、それだけでなく精神的な面でスカッと気が晴れるという効果もあります。

今日ここに着くまで緑がすごく綺麗でしたし、八幡平や十和田湖のまわりもすごく綺麗ですね。三陸海岸の方には盛岡からだと2時間位かかるので、なかなか行けませんが、広大な海を見ていると気持ちが安らいできます。健康というと「肉体的な健康」の面と、「心の健康」の面と大きく2つあると思いますが、何と言っても自然に浸ること、自然の中に居ることは、心の健康を回復して次の英気を養うのにすごく良いと思いますので、出来るだけそういうことを心がけています。

【寺田知事】

どうもありがとうございました。私の場合も皆さんと大体同じようなことですが、食事はバランスのとれたものにする。ウェイトは確実にコントロールする。そして、ストレスはやはり感じますから、出来るだけ汗を流すようにして、ストレス解消しています。

私は、40歳まではお酒を全然飲めなかったのですが、ある時から飲む練習をし、役所勤めになってから段々酒の量が増えていき、そのかわりお米

の方が少なくなってきたという感じです。

1年間に50回はゴルフ、スキー、山登りに行くと目標を立て、実行するようにしています。50日というのはなかなかできませんが、着実にやるようをしているといったところです。

さて、今回のサミットのテーマ「21世紀型の健康」について意見を交換していきたいと思います。

国民的には、30兆円もかかる医療費をどうするかという問題もあり、皆さん健康づくりにも関心があると思いますが、これからアクティブな健康を追求するにはインテリジェンスを働かせることが必要だと思います。

この前、カナダでトレッキングを30キロ位しましたら、ガイドさんに「日本人は何故こんなに体力がないのでしょうか。外国の人は確実に体力をつけて健康を維持していますよ。」と言われまして、そのことが非常に心に残っております。これからは、30兆円のうち10兆円くらいはアクティブな健康を追求するために使うといったくらいの大膽な考え方をしていかなければならぬと思いました。

予防医学というよりも、健康ドクターというような積極的に健康をサポートする仕組みが求められるようになると思います。それがひいては色々な面でその人にとってとか、国にとっての力にもなるでしょうし、個人については将来の幸せにつながってくると思います。

北東北、北海道だったらそういうこともやれる可能性があると思っています。

では、各知事さんから各道県での健康づくりの取り組みなどについてお伺いしてみたいと思います。増田知事からお願ひいたします。

【増田知事】

従来、うちの県で健康を考えるときの前提として、岩手県は自立する県であることを目指す、あらゆる所で自立する県を目指す、ということに取

り組んできました。その中で大事なのは、それに足る人材の確保で、そういった人づくりとしての健康施策はどのようにしたらよいのかということを、今まで大きな目標としてきました。

そして、県民の皆さん方の色々なニーズを考えると、切り口は特に次の3点、安心して子育てができる環境づくりと、高齢者の健康を確保していくこと、もう一つは、障害者の方々が自立して生活していく状況を確保することです。「子育て」、「高齢者」、そして「障害者」への配慮ですね。

また、岩手県は広い県土を持っていますので、これをカバーするために遠隔医療にも取り組んでいます。まだ色々な問題もありますが、IT化によって、少なくとも各地域にある県立病院を中心としたエリアで、遠隔医療やお医者さんたちの研修等を情報ネットワークに活用して行っていくというようなことが、従来型の健康づくりの政策・戦略として考えられてきました。

21世紀もこういったことを地道に着実に推進していくなければならないのですが、これからは更に精神的な心の面、つまり「ゆとり」や「癒し」とか言われる、本当の意味での豊かさの追求という部分を充実させる考え方方が大事だらう思います。

残念ながら、つい数日前に全国的なニュースになった事件が本県で発生しました。事件の詳細はまだ明らかになっていませんが、ある農村地帯で高校生の孫とその友人が祖父、祖母のところに押し入ってナイフで切りつけ、殺人未遂で捕まったというものです。テレビのニュースなどを見ていると、このような子供達が関係している事件というのは実に多くて、この夏の間でも頻発しているわけです。こうした事件を見るにつけ、心の有り様ということが21世紀の健康を考えるときに大変重要な問題だと思っています。これが健康の範疇なのか、教育の範疇なのか判然としませんが、これを食の問題で考えると、いわゆるファスト

フードを食べている子供は切れやすいという研究結果があると言われているように、実に多様な角度からこうした問題を考えていかなければなりません。

こうした中で空間的なゆとり、心の豊かさ、そしてゆっくりとした時間の流れといったことに重きを置いて、これから健康な地域づくりを更に2歩も3歩も進めていこうというのが、岩手県の21世紀型地域づくりのキーワードになっています。

「がんばらない宣言」という宣言を岩手県で出しております。頑張れ頑張れといって経済的な成長を追い求めてきたことの反省として、もっと違う尺度で地域のあり方を見つめ直していこう、ということを提唱しているのですが、最近の食品偽装事件を見るにしても、一つひとつ地道に信頼を獲得するような、本当の正道を歩むということを、これからもやっていきたいと思っています。

少し総論的な話になりましたが、方向として21世紀型といったときには、医療水準がどうだといったことではなく、もっと広い分野・テーマで地域のあり方を考えしていく、そういう切り口が必要になっていくのではないかと思っております。

【寺田知事】

どうもありがとうございました。木村知事からもお願ひします。

【木村知事】

青森県では短命県返上を目指して頑張っています。それは県民が健康で長生きしてほしいという願いからです。そして、地域社会のためには、肉体的な健康と続く世代の子供達が健やかに個性豊かに育まれて、子供を産み育てることが出来るよう、働く女性のために、努力をしているのです。

具体的に先ほども言いましたが、例えば減塩運動で、あまりしょっぱいものを食べると健康に良

くないということ、特に壮年男性の健康アップ推進運動とか、厳しい不況からくる経済の深刻な家庭の事情とか、リストラとか色々なことがあるだろうけれども、どんな辛いときでも家族がひとつになって、地域社会で支え合っていく。行政も民間と一体で経済政策を展開して頑張るから、間違っても自らの命を絶ってはいけないとか、自殺予防のためとか心のヘルスアップ事業など、あるいは喫煙対策、妊婦のお母さん達に自覚してもらう。また、心の豊かさを大事にしていこうということで、心の青森コンサートをやったり、ケア運動とか、あるいは虐待問題なんかも取りあげております。虐待を受けると、精神的に成長が順調にいかなくなる。社会人になったときに、内向的になったり。心身ともに健康でなくてはならないから、虐待の未然防止とか、解消に全力をあげていくとか、色々なことを努力しています。

健康な家庭、健康な青森県。心身ともに健康な県を目指すということで頑張っておりますが、これはやはり子供達の健康、高齢化社会を考えれば、健康は子供を大事にすることにつながるのではないかと、子供の時に健康が大事だという意識と、健康が子供を育んでいくことが持続的な健康につながっていくのではないかと。

青森県は、子どもの文化を県政の中心としています。そして、子ども文化の原点は遊びだと、遊びということは体を動かすことです。あるいは協調性とか、耐える力とかいうことも健康になるだろうし、そんなことで私たちは体験学習とか、教育教育とか、にも力を入れていきたいと思っています。

【寺田知事】

岩手県の増田知事も広いテーマで健康をとらえていらっしゃる。青森県の木村知事も健康な青森をといったことで頑張っていらっしゃる。もっと広い北海道の堀知事からもお願ひします。

【堀知事】

具体的に私どもが取り組んでいることをお話をさせていただきたいと思います。

物質的な豊かさではなくて、豊かさの質が問われる時代になってくるわけでありまして、健やかで心豊かに生活できる世界をどのようにつくっていくかということだと思います。

その時に個人というものが大変大事にされるわけですが、その個である一人ひとりがそれぞれのライフスタイルをこれから自分の責任で選択していくということになります。

そのためには、やはり自分の健康は自分でつくるんだという意識を持つことが大事だと思います。主体的な健康づくりに取り組んでいくために何が必要か色々と検討したのですが、結果的には私どもは必要な目標を示すこととし、後はそれに基づいて個人がどういう生活パターンを取るかは、個人の責任でやっていただこうということになり、昨年、「すこやか北海道21」というものをつくったのです。

これは、生活習慣の改善によって、疾病の危険因子の低減を図るために、「栄養・食生活」「身体活動・運動」「休養」「メンタルヘルス」「歯と口腔」「たばこ」「アルコール」の7つの領域と、生活習慣が発症に深く関わっている「糖尿病」と「循環器系疾患」、「がん」の3つの領域を設定し、北海道の現状とともに健康づくりの目安となる目標を示したわけです。

例えば、食塩の摂取量は成人1日当たりどれくらいあって、これはどれくらい減らさなければならないか、肥満の割合というのをどういうふうにしていくか、あるいは8020運動ではないですが、歯の8020目標をどれくらいにしようかということを、「すこやか北海道21」で具体的な目標として示しました。

特に目標に關係する行政機関、団体が一体となって道民の健康づくり運動を推進していこうと

ということで、北海道全体のヘルスプロモーションというようなことを大いに進めていかなければならぬと思っております。

【寺田知事】

どうもありがとうございました。自分で健康な体をつくるという姿勢。これが一番大事なことだとご指摘がありました。北海道では「すこやか北海道21」で目標を示し、やっていらっしゃるわけですね。

秋田県のことを少し述べさせていただきますと、「健康秋田21計画」を策定し、県民運動として生涯を通じた健康づくりを推進しています。

県として全国でワースト1に入っているのが「がん」です。脳血管疾患関係は3位です。糖尿病関係は19位で真ん中ほどですが、自殺がNO.1です。そういう状況でありますと、「健康秋田21計画」には12分野を挙げ、例えば「栄養」「食生活」「運動」とか「休養」「歯の健康」「心の健康」などを設け、アルコール関係、たばことか、自殺予防も入っていますが、健康運動を進めています。

健康づくりというのは市町村と連携しなければならないのですが、徹底してやっていこう、県民参加型で健康づくりをしようということにしています。

自殺については心の健康づくりと自殺予防対策ということで、秋田県の心の健康づくり推進協議会を設置して、また、「命の電話」ボラティアとかを含め、徹底して県警とも連携しながら進め、ボランティア活動ともネットワークづくりをしております。それでも残念ながら自殺はなくなりません。

それから歯の健康。これも進めさせていただいております。後はスローフードなども考えていかなければいけないですね。

さて、時間はあと1時間です。この後は、ゲス

トの先生方から日頃考えていらっしゃることを3分程度お聞きしまして、残りの時間はフリートークリングで進めたいと思います。よろしいでしょうか。それでは、安井先生からお願ひいたします。

【安井所長】

私は脳外科医として神経に関係している立場から述べさせていただきます。

秋田県は現在有数の高齢地域になっております。秋田に限らずに、21世紀の日本の社会は高齢社会ということです。これを健康面から考えますと、いかに元気に活動的に年をとるかという問題になるかと思います。

人間の活動を支えているのは脳ですが、つい最近まで神経細胞というのは大人になると再生することが出来ず、そのため機能回復には限界があるというのが常識とされていました。ところが最近になりまして、分裂能力のある神経細胞がお年寄りにも存在しており、しかもその神経細胞が新しい細胞を作るということが分かってきております。

神経細胞は日に10万個以上減少しますが、それは150億個以上ある神経細胞の中の使われていない神経細胞が死んでいくと考えられます。年をとりますと新しいことを記憶するという意味で若い人には叶わないにしましても、色々な知識、経験を統合し判断するということはむしろ高齢の方が優れていますし、新しいことを記憶することも時間をかけてゆっくりと行えば可能であるということが分かっております。

神経細胞が高齢になってからでも分裂し、また、新たな結びつきをつくることが出来るとすれば、こういったことも理解できるかと思います。

脳は使えば使うほど良くなると言われますが、ある程度年をとってしまいすると、このようなことを最初から諦めてしまっている可能性があります。しかし現在は70才を過ぎても非常に元気で活動的な方はたくさんおられます。

こう考えますと、色々な物事に対して貪欲な気持を失わないようにしなくては駄目ですし、新たな事に興味を持ち続けることが非常に大事だと思います。そして、それをサポートする家庭や地域の社会構造も必要になってきます。これは言い換えると、クオリティ・オブ・ライフ、生活の質をいかに保つかという問題になるかと思います。

この時に注意を払わなければならないのは、高齢者に限りませんが、ハンディキャップを持った人に対して、社会がどのような配慮をして補っていくのかが大事になってくるのではないかと思います。色々な原因で背負ったハンディキャップは、クオリティ・オブ・ライフを制限することになるかも知れませんが、クオリティ・オブ・ライフを追究することの妨げにはならないようにしなければならないと思います。

そういう意味で先程も出ておりますが、精神的なものを含み、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）の確立を妨げる障害をなくすこと、様々な意味でのバリアフリーをいかに達成するのかということが、これから21世紀型の健康を考えていくうえで非常に大きな課題になるのではないかと思います。

健康から離れますと、21世紀の健康を考えた時には、クリーンエネルギーといった環境問題もおそらく今回の主題とは関係ないかも知れませんが、絶対必要なものだろうと思っております。

【寺田知事】

安井先生の観点は、使えば使うほど脳の価値は高まるということで、貪欲に生きなさいということ。確かに仰るとおりだと思います。全てにあてはまると思います。クオリティ・オブ・ライフの向上にはそういったことが必要だろうということです。

次は、田中先生からお願ひします。

【田中教授】

今日、各知事さんと握手させていただきました。私は商売上、口の中にパッと目がいく習慣があります。4人の方は全て歯が立派です。テレビの前でお笑いになって皆さんの歯を是非、見せていただきたい。歯があるということが全身的健康にいかに大切か。健康の源は健康な歯があることではないかという気がいたします。

第一にお話させていただきたいのは、食文化と生活習慣病でございます。古いお話ですが、小林一茶の句で、「歯固（はがため）の歯一枚もなかりけり」というのがあります。また、紀貫之の土佐日記の一節にも歯固という言葉があります。古代では、お正月のおせち料理は歯固の儀式として用いられたもので、荒布、芋茎、押鮎、黒豆などがあり、堅い物が噛めるかどうかのバロメーターで自分の健康を祝いました。現代では「一本の残れし我が歯で梨を噛む」の句があり、食物を噛んだときの歯の感触（歯ざわり）や味わいといったものを楽しんでおります。このことから食生活の時代の変遷が計り知れますが、現代人の刻み料理、柔らかくして食べる習慣よりも、自然食品そのもので、自分の健康を知る手段としての歯固の儀式は古代人に学ぶものがあります。

「今あなたは歯科治療に何を求めていますか」との高齢歯科患者への問い合わせに対しては、①心身ともに健康でありたい、②若々しくありたい、③美しくありたい、④豊かでありたい、の順で答えが多く、噛めれば良いといった時代から社会環境の大きな変化が見られます。すなわち、歯科治療の良否は老後のクオリティ・オブ・ライフに大きく関与することになり、老化を遅らせるための予防治療の対策が必要だと思われます。そのため、80歳になっても20本の歯を残しましょうとの「8020運動」が提唱されています。歯の喪失の度合いと全身機能の関連に関して、歯の残存率が高いほど自立した日常生活を営むことができ、寝たきり老人

や老人性痴呆が少ないといった疫学的調査報告によるのですが、これの意味するところは歯の欠損（喪失）があつても適切な修復処置をすることによって80歳になっても高いADL（日常生活における基本動作能力）を持つことができますといった提言です。この意味を患者サイド（地域住民）にも正しく理解させることが必要です。従って、歯の健康と全身健康との関わりについて行政面からの支援のもとで調査することは意義があると思われます。

一方かかりつけ歯科医の問題ですが、息の合う歯科医師に出会えるかは運命であると斎藤英四郎氏（新日鉄名誉会長）は言っています。「歳をとるとほとんどの人は多かれ少なかれ自分の歯を失い、義歯に頼らざるを得ない。その場合、夫婦のような自分にぴったり息が合う先生、自分の口の中の欠陥をよく理解している先生に出会えるか否かは運命の様なものだ。このことは、老後の幸福を左右すると言っても過言ではない。」と言っております。従って、「かかり付け医」の重要性を認識しておくと良いと思われます。自分が寝たきりになつたとしても、自分のお口の状態を熟知した歯医者さんとの連携があるとすれば、ある程度解決することができます。

【寺田知事】

ありがとうございました。田中先生からは歯があるから健康だ、歯がなければどうなるか一人ひとりがしっかりと理解することが大事で、行政としてもやることも沢山あるだろうという指摘は、その通りだと思います。では、吉岡先生からお話を伺いたいと思います。

【吉岡副学長】

「健康日本21」の各県版として色々な県で目標値を設定しておりますが、青森県でも木村知事からの要請がありまして、「健康あおもり21」という

のをわりと早く策定させていただきました。

来年、4年に1度の日本医学会総会というのがありますが、その中でシンポジウムで取り上げられまして、7、8県の県からその県独自の取り組み方、青森県でいうと雪が多いですし、冬の間、たぶん身体運動なんていうのは少なくなるということもありますし、各県に色々な特色がありまして、それに対する政策というか目標値がその総会で述べられるかと思います。

青森県としてはキャッチコピーというかスローガン、キャッチフレーズというのを作っておりますし、例えば栄養食生活では「バランスの良い食生活で適正体重を」とか、身体活動運動では「全ての年代で運動習慣を身につけましょう」とか、アルコールの方は「酒は飲んでも飲まれるな、度を超したら要注意」とか、こころと健康の方では「忘れないで、あなたは一人じゃない命大切」とかこういったキャッチコピーをつけて、広く県民に皆さんでこれを守っていきましょうということをやっております。

スポーツ医学、運動生理学の分野をずっとやってきていまして、それを踏まえますと、これから21世紀型の健康というのは、筋肉、筋力、それから平衡、バランスですね。もう一つは、今までよくスポーツ医学等でもいわれておりました心臓循環器、肺機能アップですか、心肺持久力ですね。筋肉の力で平衡感覚をつけて持久力をアップする。この「三つ巴」で一人ひとりの健康が維持できるのではないかと思います。「三つ巴」、私の言った言葉ではありませんが、均整のとれたエクササイズとでも言いましょうか。そういう事を推奨していくべき良いのかなと思っております。

今まで、筋力アップというと力を発揮するということで、特に高齢者では力を出す時に、呼吸を一度ぐっと止めるわけですから血圧が上がり危険だということがありまして、筋力をつけるのは止しましょうということだったのですが、やはり

色々なデータ、実験結果を見てみると、それ程危険ではありません。高齢者こそ筋力アップが必要だと思います。

人間は年をとってくると下肢の筋肉、下腿部、大腿部の筋肉、特に大腿部の前方の筋肉が一番最初に衰え、50歳以降になると、その衰えが顕著になってきます。膝を曲げるとき、椅子に座るとき、畳から立ち上がる時とか多分知らず知らずのうちに声をかけると思いますが「よいしょ」とか「こらしょ」とかですね。その意味で膝を伸ばす足の前方の筋力をアップしていかなくちゃならないと思います。

平衡感覚というのは五感を刺激することになります。歩くにしても、その辺のもの、自然を目で見て、においをかいり、鳥の鳴き声を聞きながら、色々な運動をする。ジョギングするウォーキングする、というのも平衡感覚を刺激することとなります。

従来言われている心肺機能は、例えば有酸素運動で向上しますが、酸素を沢山使つてやる運動をする、心臓の心拍数を1分間に120位で長い時間運動をすれば、心臓も活性化されますし、肺の機能もアップするというようなことが言われております。筋力と平衡と持久力という「三つ巴の運動」というか、毎日毎日の生活の中にこういったものを取り入れていけばいいのかなと思っております。それこそ21世紀型の健康であると思います。

スポーツ医学、運動生理学を研究してきましたが、10年位前から宇宙医学分野の研究も始めました。宇宙飛行士の毛利衛さんや向井千秋さんが宇宙の無重力を経験しましたが、僕らの研究仲間である彼ら彼女らの大腿部の所を計りますと、たった1週間か10日間位の宇宙飛行で、一割近く筋肉が小さくなってしまっている。無重力では、筋肉を縮めるときに力が入らないので、筋肉が萎縮してしまう、あるいは衰えてしまうんですね。負荷というか、刺激というか、それがなければ筋肉の

機能が維持されません。そんな意味で、頭でも何でも常に刺激を与えるということをこれから心掛けていって、それぞれ自分で自分の健康をつくろうという構えでいけばよいのかなと思いますし、他人から与えられるものでは決してないと私は考えております。

【寺田知事】

どうもありがとうございました。吉岡先生からは筋力、バランス、持久力、心肺機能のアップには、日常生活の中に運動を取り入れることが大切というお話をありました。

3人の先生方の話を聞いていて、健康も地方分権と同じで自助・自立が一番求められる、大切なもののような感じがいたしました。

この北東北、北海道は雪国で寒いです。この中で健康を維持するというのは、ある面では状況は厳しいところです。自然は豊かなのですが、冬期間というのは大きな問題があるのかなと思います。

あと残った時間40分位でございます。自由にフリートーキングを進めさせていただきたいのですが、健康はものすごく広くて永遠の課題だと思います。

健康問題というのは、いかにして生涯健康でいられるかということ。そして、その健康の大切さをどのように県民、道民に訴え、いかに住民自ら健康づくりを進めていってもらえるのかにかかっているのではないかと思います。

今まであまりにも医療の方に目が向きすぎて、健康な体づくりは陰になっていた感があります。これからの時代は、精神的な面も含めて健康な体づくりが最重要になってくる、長寿の社会はそういう時代ではないのかなと思います。

では、自由にお話していただきたいと思います。手を挙げてお願いします。安井先生お願いします。

【安井所長】

長く生きる、何故長く生きるかということですが、ただ長ければ良いということではなく、先ほどのお話にも関係してきますが、一人ひとりがどういう生きがいを感じながら生きていくかという目標が必要です。例えば、運動したら血圧が下がりますよと。カロリーを制限すれば、確かに糖尿病の予防になるかもしれません、何故そうするかという部分がないと結局目標がなくなってしまいます。出来ないと思います。

いかに一人ひとりが自分の人生を考えて、自立した目標を持てるか。そういったものを持てるような北東北、北海道であれば、先程から問題になっている自殺の問題とか解決していくのではないかと思っていますが、それは非常に難しい問題です。

【寺田知事】

そうでしょうね。長寿と生きがい、これは永遠の課題でしょうし、自分の人生というのは、今ご指摘のあったとおりだと思います。木村知事お願いします。

【木村知事】

食文化とか生活の基本である食事とか、あるいは、風邪引いたら医療も大事だし、考えてみれば、先程肉体的にも刺激が必要と吉岡先生からお話があったように、オシャレをした方がよいと思います。

オシャレをする人は自分を見失わないといわれます。青森県はファッショントークを目標としています。そして高校生のファッショントーク大会を成功させました。

石川県では昨年、高校生甲子園ファッショントーク大会として真似しました。これは、文化が産業を興していく時代だと。人づくりと同時に文化面においても健康志向が根底にあると思います。

オシャレをする人は自分を見失わない。一つの

刺激ではなかろうか。季節の移りかわりの装いも、街行く人のファッショショーンショーだと。

普段の暮らしの中で目に付く、色調とかデザインというもののファッショーン性というものを見ると自分はどうしたらよいだろうと思う。そのことでオシャレを生活の中の健康の基軸しようと、心にファッショーン。そのことからいたら健康が大事なんだよという意識が高まってくると思って期待しております。

【寺田知事】

そうでしょうね。オシャレは健康の基本というのはそうでしょうね。

【木村知事】

刺激と先ほど話がありましたが、自分はこの年令になると眼鏡を必要としつつあるのかも知れないと思いながら、眼鏡を使っていない。それは目に刺激を与えているということです。

また、今から20年位前ですが、同級生達は大抵眼鏡をかけていた。眼鏡が似合う人がいる。眼鏡自体もアクセサリー的なファッショーン性がある。

その人にあった眼鏡が良い。安全確保の為に眼鏡は拒否してはいけない。

眼鏡を否定するわけではないが、眼鏡自体もアクセサリーなりファッショーンで、生活に必要でけれども、自分に刺激を与えれば、目が頑張ってくれるだろうと思い、痛くなる位に刺激を与えております。

それから美しいものを見るようにしているから目が機能していると思います。

【寺田知事】

私は、離せば見えた40代、離して見えない50代で、眼鏡がなければどうにもならないです。

確かにオシャレというのは色々な解釈の仕方があるのでしょうが、オシャレというのは相手に対

する心配りでしょうね。堀さん何かありませんか。

【堀知事】

今日は、安井先生、田中先生、吉岡先生と、健康づくりには大変すばらしい先生方を選んでいただいたなと思います。

安井先生は、好奇心、年とっても好奇心は失うなということで、いま木村知事が仰ったように、ファッショーンも好奇心ですよね。

そういう意味で、やはり極端に言ってみれば、ストレスも刺激に変えてしまうような生活の仕方というかそういうものが大変大事だと。

田中先生から歯の重要性。歯というのは、ただ噛むだけではなく、味わったり、人を美しく見せたり、会話を楽しんだり、色々面から健康にとつて大事だと。

吉岡先生には、いわゆるパワーがなかったら、やはり健やかに心豊かに生きられないよというようなお話をいただいたと思うのですね。

それぞれの先生方の貴重なお話をいただきまして、これからやはりバランスの取れたライフスタイルというものを目指していくかなければならない。そのための場所として、北東北、北海道というのは、ある意味では恵まれた地域になるのかなという思いで、一層意を強くしたわけあります。

【増田知事】

やはり、次の北海道・北東北を担う世代の子供達がどういった生活をして、どういった状況でいるのかということを、我々行政の責任者は勿論、広く県民や道民の皆さんがあとと正確に理解していく必要があると思います。

この間の打ち合わせの時に聞いたのですが、岩手県は子供達の肥満が多い。これは気候の問題として、冬は雪のためにどうしても運動不足になる、ということが影響しているのかどうかわかりませんが、運動能力を見ると、50m走では全国平均や

東京の平均よりも遅いという結果が出ています。

一般的に考えると、遊び場もいっぱいあるから、少なくとも東京都の子供らには負けるはずがないだろうなと思っていたが、50m走は遅いようです。それでよくよく調べてみると岩手の子供は普段歩いていない。ご承知のとおり、過疎化が進んで学校を統合すると家から学校までの距離が遠くなつて、とても歩いて通えなくなり、スクールバスで通うことになります。冬になると雪が深いから自動車で送迎される。結局ドア・トゥ・ドアで家から学校まで乗り物になります。歩くことについては、案外、都市部の人たちの方が地下鉄の階段も上り下りしていて、地方の人たちより遙かに歩いている。肥満度については、この間調べたところでは、小学校は男女とも1年～6年の全部で岩手の方が全国平均より高かった。中学1年、2年になると、女子は全国平均よりちょっと低くなるのですが、原因はよく分からぬけれども、肥満度はいずれにしても高い。

それから、朝ご飯を食べずに登校する朝食欠食児童の割合を比較しても、いわゆる都会の子供達と岩手の子供達は全然変わりません。我々成人あるいは高齢者にとっても、健康は非常に大事な問題ですけれども、次の世代の小学生や中学生の子供達が、どういう環境におかれているか、現実に体がどうなっているか、心がどうなっているのかということについて、しっかり理解していく必要があると思います。おそらくそういう数字は、秋田県さんも青森県さんも岩手県とそれ程大きな違いはないのではないかという気がします。

先程、田中先生からも、行政も広域のブロック単位で色々調査やってはどうか、というお話をありました。今日のサミットの合意事項として、4道県で「健康づくり推進会議」というものをつくつて、その中で歯科対策も連携して進めるという項目を入れようと考えていますので、ちょうど良かったと思います。今お三方の先生方から指摘し

ていただいたような点を入れて、中身を充実させていきたいと思います。特に次の社会を担う子供達の健康問題に、医療関係者や社会教育の関係者、学校関係者、そして我々もしっかりと目を向けるということが大事だなと思いながら伺っておりました。

【寺田知事】

今、増田知事から、岩手の子供に肥満が多いとか体力がないとかありましたが、秋田県も同じようなのです。

背が高いのですが、体力がないというデータがでていますね。

【木村知事】

青森県の場合も同様に、体は中学校の男女とも大きいのですが、体力がない。肥満児はいないわけではありませんが、秋田県さん、岩手県さんはないと思います。

【寺田知事】

基本的に背が高くて体力がないのは北東北3県の特徴。

【木村知事】

体位は男女とも全国平均よりうんと良い。中学生も高校生も。でも、体力が相当低い。だからこれから合意する項目の中にスポーツを通じて健康づくりを進めるという項目があつてもいいのではないかでしょうか。

【堀知事】

肥満度は確実に北海道、東北は多い。

【増田知事】

昔よりは多くなつてきている傾向は否めないと思います。

【堀知事】

先ず歩かない。北海道は特にそうですが、車社会になっている。完全に。歩数が東京都に比べると、1日千歩以上違うわけです。

これは大人もそうですが、子供もそうですから、この辺はやはり深刻です。体格は良いけれども、持久力とか、いわゆる体力がない筋力がないということにつながるんだと思います。それが精神力にも影響しますね。

【吉岡副学長】

今、歩数の話が出ましたが、歩数は田舎の子供たちは本当に少ないですね。首都圏の子供たちはむしろ多いわけです。通学や塾通いに地下鉄の階段を使うことが多いように思います。

あとは運動量に比べて摂取カロリーというか食べる量がすごく多いですね。これは簡単な計算で摂取カロリーと消費カロリーの差が全部脂肪にくついていくのですから、肥満傾向になってきます。例えば学校教育での体育の時間、ここで言って良いのかどうか分かりませんが、体育の先生方で生徒といっしょに動けるような人が少なくなっています。是非、若い体育の先生というのが必要ではないのかなと思います。一緒になって、遊ぶというかそういう事をやるということですね。

それから中学校、高校と同じように大学でも今迄体育の時間というのがあったのですが、それがなくなってしまうというのも残念ですね。動くということ、運動することが人間に対して一番大切なことなのですね。それが段々と、ないがしろにされていくって、それでなおかつ摂取カロリーが多い甘いものをたくさん食べたり、油っこいものが多く含まれているジャンクフードですね、それらをとる習慣が小さい頃についてしまいますと、行く末は寺田知事が言われたように若い時から、生活習慣病、糖尿病の予備軍だということになります。

す。

【寺田知事】

仰るとおりです。それから歯は噛むということで一番先にお世話になるのですから、歯の事は社会でもっと関心持っていたいとも良いと思います。歯は体力づくりの基礎になってくると思うのですが。

【田中教授】

私が今すごく関心を持っていることは、老人の精神心理的な変動です。近年、介護施設に行くと、刻み食や流動食を与えて食事をさせている場面に遭遇することがありますが、人間は本来、歯でもって噛む、その触覚が脳を刺激することによって生活感を味わうことができると言われております。

喪失体験、役割喪失、経済的困難、使命感の喪失など社会環境の変化が多くなるほど、不安、欲求不満の増加、また自分の殻に閉じこもりがちになり、幸福感（生き甲斐）を忘れることがあります。せめて、食べる楽しみや活力を回復、活性化することにより、生き甲斐を与えるような地域におけるコミュニティの連携はすごく大切だと思います。

【木村知事】

歯が良い人はスポーツに強い。歯をしっかり噛めることがスポーツマンにとって基本なんだよね。

私はボクシングをやっておりましたが、どのスポーツでも一流選手は歯が良い。

歯を食いしばってという言葉があるじゃない。歯を大事にした人は人生の歩み方も強くなるし、スポーツもいい。スポーツ選手で優秀な人は歯にも元気があるんだよ。

【田中教授】

火事場の馬鹿力といいまして、その時には吉岡先生が筋肉のことを申しましたが、やはり持ち上げるときには、歯をぐっと食いしばって腹に力をいれなきゃいけないという、これそうですね。

まさしく木村知事が仰るとおりだと私は思います。

【寺田知事】

安井さん、脳の専門家の立場から何か。

【安井所長】

チューインガムを噛むと脳が活性化されると言いますよね。

だから体の刺激を絶えず脳に与えて脳の活動レベルを維持していくということは非常に大事なことだし、脳の生理学からみてもそのとおりだと思います。

先ほどから出ています、子供の食生活の話がありますが、人間の体というのは飽食とか運動が少ないということを想定して出来ていないんですね、その進化の歴史から考えて。

というのは、過去の人間の歴史上でも、食べ物が余った時代というのは今だけなんですね。

それから自分以外の足を使って動ける時代も今だけなんですね。そういうことは、人間の体には想定されていない。そのためには、そういったことを本来やらなければ、体が退化するんだということを皆さんに出来るだけ知ってもらって、そうしないようにやらなければいけないのだということを、教えていかないと駄目だらうと思います。

人間の身体は、進化の結果としてこうなっているのですが、飽食時代になってから100年も無いわけですから、飽食にあわせて人類が進化するにはちょっと足らないわけです。

だとすると、今の私たちはそういう体だということを認識して、それに対する対応を皆さんに知つてもらわなければ駄目だということを言って

いかなければなりません。

【吉岡副学長】

人間の染色体の中に肥満の遺伝子というのがあるのだそうです。大昔の人でも肥満の遺伝子というのはちゃんとあって、だけど太れないだけであって、環境が悪いため食べ物がないですから、大昔の人の最も愛される形というのは土偶とかビーナスを見ても全部肥満している体つきですね。大昔でも食べれる環境にある人、すなわち太っている人を崇拜するという感じですよね。

現代はその遺伝子がおおいに活躍しています。環境がよく、なんでもたらふく食べると、その遺伝子のおかげで肥満になってしまうのですね。

その辺のところを我々はこれから真剣に対応していくなくてはならないと思っています。

【寺田知事】

クレオパトラなんか美人の代表みたいな形で、すごく豊満ですね。

あちらの社会というのは、肉付くことが美人で綺麗なようなのですがね。

【吉岡副学長】

女性の豊満な、ないものを憧れとして絵に描くのでしょうか。逆に今の時代は飽食で太るし、あこがれでやせるという。

さらに体力を子供達学生達につけないといけないと思います。体力という言葉には自分で自分の体を守るというのが含まれます。防衛能力といわれ、病原菌から体を守る、アレルギー性疾患に対する防衛、過酷な環境から身を守る、そういう能力も含めて体力なんだそうです。単なる体がでかい、力持ちというだけではなく、ばい菌、ウイルスから自分の体を守る免疫力とか防衛能力を含めて体力があると言うらしいです。

【寺田知事】

後残りの時間10分位になってきました。北海道、北東北3県が手を合わせて、健康な21世紀型の人づくりということに今トライしよう、これから時代は積極的に健康を享受しよう、と言うことが主眼ですが、日常生活における健康づくりにも工夫をしなければならない時代にもなってきていますね。

最後1分位ずつ、これといったものを指摘していただければ幸いでございます。安井先生からお願いします。

【安井所長】

先程の話と変わるかもしれません、健全な精神は健康な肉体に宿るといいますが、必ずしも現実にはあてはまらないのではないか。というのは、世の中には肉体に問題を持っていても精神が健全な方はたくさんおられますし、逆に健康な肉体を持っていても、精神を病んでいる方がたくさんおられます。

最近は特に病気ということからいいますと、遺伝子がわかるようになって来ましたので、発病して病気になる前からわかるということが問題になる時代になっています。

そうすると健康というものをいいものだということにすると健康でないということは悪いことになってしまいます。

それを進めたのがナチスだと思いますが、そうではなくてQOLということをいいましたけれども、こうでなくてはいけないんだということだけではなく、ある程度幅を持って、それから外れていてもそれを受け入れられるようにして、健康を捉えていただきたいという気持であります。

【田中教授】

昭和60、1986年ですが、当時中曾根首相がこれまで言っていた老人とか高齢と言う言葉にかえて

長寿社会という言葉を使おうと提案したのです。

ちょうど16年も経過したことになりますが、早くも21世紀を迎えて超高齢社会ということになりました、長寿の念願が達成されました。

その手段の中には確かに医学の進歩というものがあった。けれども、長寿の仕方、長寿をどう生きていこうかということの問題については未解決の部分がたくさんあるのではないかと思います。

寝たきりか、痴呆か、または健康なままの障害、その選択の自由、これは堀知事が仰いました自己の選択権にゆだねられていることですが、医師の技術と患者の精神の分離というのは残されたままです。

本日、21世紀型の健康のディスカッションでは、まさしく長寿のあり方、生き方について色々とご示唆をえてくれたのではないかと私は思っています。

【吉岡副学長】

先ほどお話ししましたが、刺激ですね。色々な刺激を自分の体に積極的に与えるということが、体のさまざまな機能をアップすることにつながります。人間、動物というのは刺激に対して反応しますし、反応の仕方ですね。少し話を進めますと、反応すると疲労というのがおきますが、疲労というのもなくては人間の体を維持する事が出来ない。疲労は生体防衛機構の一つであり、体にとって必要なことです。疲労があってこそ、我々の生命の維持がうまくできるというわけです。

疲労の解消、そして心地よい疲労の解消、積極的疲労の解消というのは、そのために、先程、筋力とか平衡とか持久力とか「三つ巴」の均整のとれたエクササイズというか、バランスの取れたものを日常の生活に取り入れて、毎日の生活を進めていけばよいのかなと思っています。

【増田知事】

「健康に県境はない」、ということを今日この場で再確認をしました。その認識にのっとって、いわゆる健康づくり行政というのを進めていこうとなりましたが、これが今日の最大の成果ではないでしょうか。

今まで、「観光に県境はない」「環境に県境はない」ということで進めてきましたが、先生方や他の道県の知事さんの話を聞きし、特に、「21世紀型の健康」を考える場合には、課題も大変大きいわけですけれども、これもやはり県境というものをなくして良い心をつくっていく必要性がこの場で再確認出来ましたし、次の出発点になるなという気がしました。

【木村知事】

21世紀は高齢化社会と言われている。お年寄りの健康と心に安らぎを与えるとなると、少子化社会ではいけないと思います。

子供を育む環境を行政の我々が県民と一緒にとなって努力して、もっと子供を産んでもらい、子供達がお家の中で遊び、外で遊ぶ。そういう環境にする。

幸い自然に恵まれている子供といったら北海道、北東北だと。こども夢王国、北の時代だということを目指していきたいと私はそんな気がします。

【堀知事】

少子高齢化に伴って、都市に住む人も地方に住む人もいかにして健やかに老いるか、老いを楽しんで人生を全う出来るかということが大きなテーマ

マになるんだと。

そういう意味で、幸せを実感できる充実した質の高い暮らし、まさに安井先生も仰っておりましたが、クオリティ・オブ・ライフが求められる時代だろうと思います。

そういうことを考えて、豊かな自然とか、温泉等の資源が多い、生命を支える食材にも恵まれている、自らスポーツを楽しんだり、土を耕したりといった、多彩なライフスタイルを提案できる北海道、北東北は、まさに、「近き者悦び、遠き者来る。」という、クオリティ・オブ・ライフの舞台として、一層輝きを増すんだろうと自信をもって進まなければならないと思います。

【寺田知事】

今日はどうも皆様大変ありがとうございました。行き着いたところは、健康については県境がないということ、これから長寿の社会はクオリティ・オブ・ライフを高めることが大事だということ、行政も地域住民と手を携えて自立する形で健康な生活を送れるようにしていかなければならないというようなことではないでしょうか。

本日は、吉岡先生、田中先生、安井先生、には医学的な面からも非常に有意義なお話を賜り誠にありがとうございました。今後とも健康活動に更なる御支援を賜りたいと思います。

以上を持ちまして、意見交換を終了させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。



第6回北海道・北東北知事サミットにおける合意事項

I 21世紀型の健康

我が国では、20世紀後半の急激な社会経済・科学技術の発展により、社会保障制度等の充実や医療の高度化が進み、かつて経験したことのない長寿社会を迎えてます。その一方で、飽食・偏食・運動不足などに伴う生活習慣病、増え続けるストレスによる心身の変調、目に見えない化学物質による健康被害など、私たちの健康を阻害する新たな要因が生じているとともに、進んだ医療技術や医薬品への過度の依存が、却って本来人間が有しているべき強さを喪失させる例も見られるようになっています。

これまで20世紀に確立された健康の概念は、「病気にならないようにする」という消極的なものでしたが、これから21世紀型の健康は、現代の新たな健康阻害要因を克服し、アクティブな生活を通じて、本来人間が有する生命力を呼び覚まし、健康を保持・増進し、積極的に健康を享受することを主眼とするものです。

北海道・北東北3県には、豊かな自然、多様な温泉、安全・安心な「食」などの地域資源とゆったりとした時の流れに恵まれており、これらは、心身を癒し、健康の増進や維持、回復に役立てることのできる可能性を秘めています。こうした地域の持つ優位性を最大限に生かし、子どもから高齢者までの全ての人々が、日常生活の中にちょっとした健康づくりの工夫（インテリジェンス）を加え、生活の質を向上させることが、この地域を一步進んだ健康を育む地域にします。

北海道・北東北3県は、これらの点に留意しつつ、21世紀型の健康を育む地域づくりを積極的に進めため、相互に緊密に連携を図り、共通課題の解決に向けて取り組んでいくことを確認し、施策の基本方向を示すため、以下のとおり合意します。

1 共通課題の解決に向けた推進体制の確立

北のくに健康づくり推進会議（仮称）の設立（4道県合意事項）

北海道・北東北における健康社会づくりを加速するため、相互に情報交換を行うとともに、共通課題の解決に向け広い視点からその方策等について検討する広域連携組織として「北のくに健康づくり推進会議（仮称）」を設置します。

<北のくに健康づくり推進会議（仮称）での主な検討課題>

○ 健康情報ネットワークの構築

北海道及び北東北の人々の手軽な健康づくりの利用に資するため、北海道・北東北の有する資源を活用した健康づくりの取組や保健・医療・福祉等の北東北の健康関連情報を提供する健康情報ネットワークの構築

○ 歯科保健対策の充実

健康の維持に欠かせない歯を守る「8020運動」推進に係る広域的な連携方策や、科学的データ等に基づく歯科保健対策の展開に向けた調査研究などの歯科保健対策の充実

○ 自殺予防対策の推進

自殺率が全国的に上位という共通課題の克服を目指した自殺予防対策の推進

○ スポーツによる健康づくりの推進

スポーツを通じた心と体の積極的な健康づくりの推進

○ 食生活の改善などによる健康づくり諸施策の推進

北海道及び北東北が連携することで効果的に進めることのできる健康づくり諸施策の推進

2 21世紀型の健康を育む地域づくりの推進

(1) やすらぎと癒しのくにの形成推進（4道県合意事項）

21世紀にふさわしい心身の健康の維持・増進という観点から、北海道・北東北が有する様々な地域資源の魅力を明らかにし、やすらぎや健康を享受できる地域（やすらぎと癒しのくに）の形成に向け、そのあり方や推進方策について検討を進めます。

(2) 健康を育む安全・安心な北の「食」づくりの推進（4道県合意事項）

安全・安心を基本とした「食」の提供に向け、日本の食料自給を支える供給基地として、新鮮でおいしい食べ物に関する情報発信をはじめ、「北のくに」らしい食文化の定着を図るための情報交流を行います。

3 健康を支える諸機能の充実

(1) 県境地域における救急医療体制の充実（3県合意事項）

県境地域における救急医療体制の充実強化を図るため、県境周辺地域の救急患者発生を想定した効率的な救急医療体制のあり方について共同で研究します。

(2) 医師確保対策の推進（4道県合意事項）

公的医療機関及びへき地における医師不足に対応するため、共同で医師確保対策について検討します。

(3) 県立病院等の医療スタッフの交流等の推進（3県合意事項）

県立病院等に勤務する医療スタッフの人材育成及び技術向上を図ることを目的とした交流研修や派遣等を推進します。

II その他の合意事項

1 北東北3県合同の大坂及び名古屋事務所の設置（3県合意事項）

大阪事務所及び名古屋事務所について、3県の相互連携による機能強化を図るため、合同事務所の早期設置を目指します。また、大阪事務所については、新たに3県合同による、観光・物産などの情報発信拠点の整備について検討を進めます。

2 合同のソウル事務所の設置（4道県合意事項）

ソウルにおける4道県合同の事務所機能の整備については、平成14年11月の開設を目指して取組を進めます。

3 合同のシンガポール事務所の設置の検討（4道県合意事項）

シンガポールにおける4道県合同の事務所の設置について、検討を進めます。

4 北東北3県の秋田地域I X共同利用の検討（3県合意事項）

秋田県に設置される地域I Xの北東北3県による共同利用の可能性について検討を行います。

5 4道県知事によるリレー・トップセミナーの実施（4道県合意事項）

北海道及び北東北3県連携気運の一層の醸成を図るため、4道県知事が他の道県に出向き、幹部職員等に対し講演等を行うリレー・トップセミナーを実施します。

6 人事交流の拡大（3県合意事項）

北東北3県の連携・協力体制の一層の強化に向け、3県職員の資質の向上、相互理解の促進、強固な連帯感の醸成を育むため、知事部局職員の人事交流を拡充するとともに、新たに教育委員会において教職員の人事交流を進めます。

7 北東北の豊かな水と緑を守る取組（3県合意事項）

「ふるさとの森と川と海」を守るという共通の理念に立って条例を整備するなど、広域的な連携による取組を進めます。

8 「十和田湖水質・生態系改善行動指針」に基づく取組の強化（3県合意事項）

十和田湖の水質保全対策を強化するため、青森、秋田両県で策定した「十和田湖水質・生態系改善行動指針」に基づき、汚濁負荷削減のための調査研究を行うなどの取組を進めます。

9 経済的手法等の活用による産業廃棄物対策（3県合意事項）

産業廃棄物の無秩序な広域移動の抑制や廃棄物の発生抑制など、産業廃棄物行政をめぐる課題に対しては、これまでのように規制的手法を中心とした個別的な対応では限界があります。

特に、これまで、首都圏からの産業廃棄物に起因する不適正処理事案なども発生していることから、このような苦い経験をも踏まえ、3県が連携し、かつ経済的手法という新たな手法を活用した産業廃棄物対策を進めます。

(1) 北東北3県内の産業廃棄物の発生抑制を図り、リサイクルを促進するため、産業廃棄物減量化・リサイクル促進税制に係る制度の整備を、産業廃棄物の埋立量に応じて課税する枠組みのもとに、平成14年中に行います。

(2) 県外から搬入される産業廃棄物の適正処理の推進及び地域の環境の保全を図るため、搬入事前協議の条例化及び環境保全協力金制度の整備を、平成14年中に行います。

参考資料1

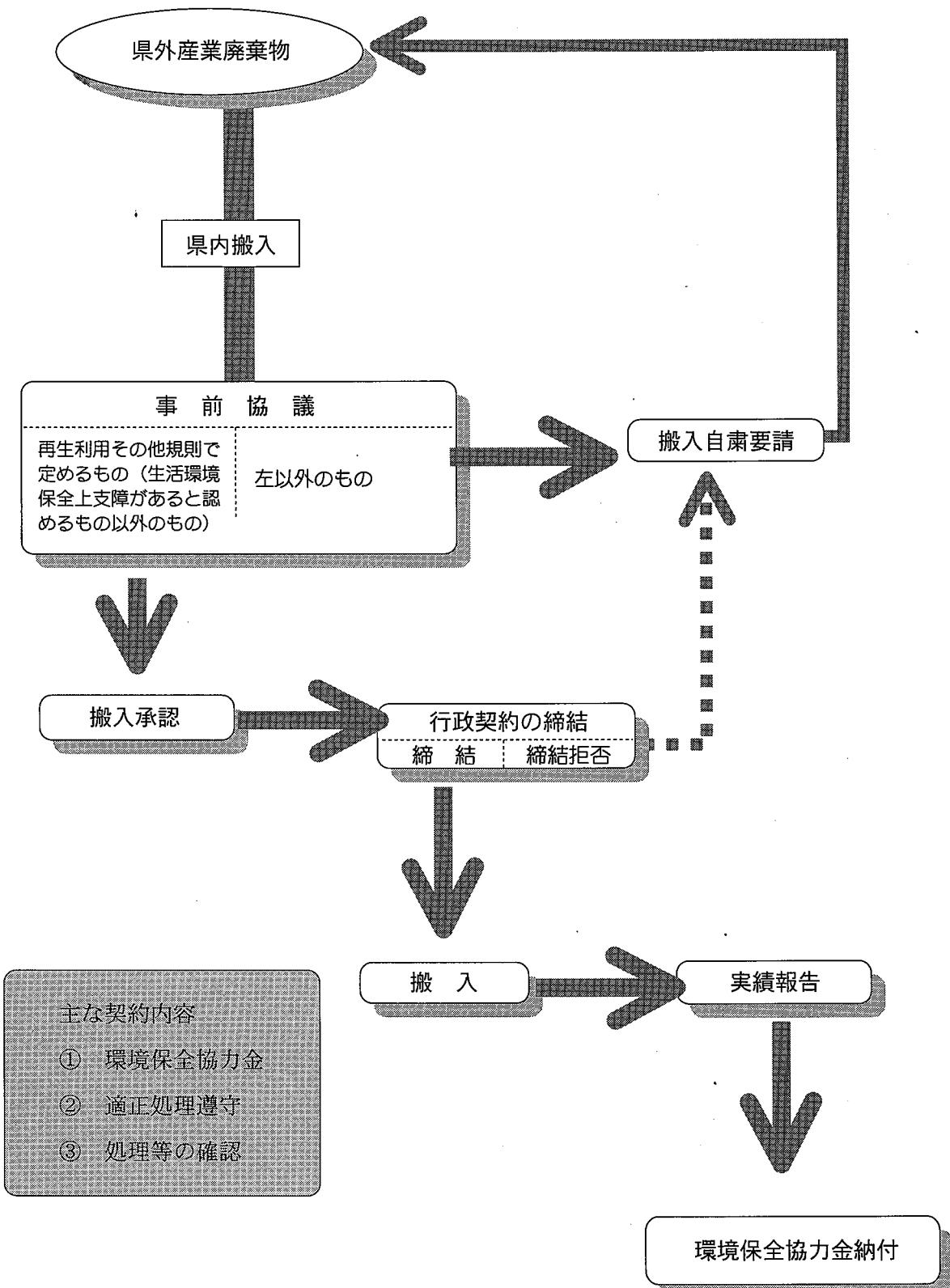
産業廃棄物減量化・リサイクル促進税制の概要

仕組み (概念図)	<pre> graph TD A["排出事業者 (納稅義務者)"] -- 課税 --> B["中間処理施設 (納稅義務者)"] B -- 課税 --> C["最終処分場 (特別徵收義務者)"] C -- 課税 --> D["最終処分場 (特別徵收義務者)"] E["非課税"] --> F["最終処分場 (特別徵收義務者)"] </pre>	
	<p>目的・使途 産業廃棄物の発生抑制及びリサイクルの促進に関する費用に充てるため</p> <p>納稅義務者 排出事業者又は中間処理業者 (最終処分場へ産業廃棄物を搬入する者)</p> <p>課税対象 最終処分場への産業廃棄物の搬入</p> <p>課税標準 産業廃棄物の重量</p> <p>税率 1トンにつき1,000円程度</p> <p>徵收方法 特別徵收</p>	

※参考 税率は、中国3県（鳥取、岡山、広島）においては1トンにつき1,000円

参考資料2

県外産業廃棄物に対する事前協議・環境保全協力金制度の概要



これまでのサミットの経過及び合意事項

(敬称略、あいうえお順)

■第1回目〔平成9年10月29日〕

〔開催地〕青森県十和田湖町休屋（遊覧船上）

〔テーマ〕北東北の観光振興

〔ゲスト〕小佐野政邦（国際興業社長）

木元教子（評論家）

山之内秀一郎（JR東日本会長）

船曳寛眞（JAS社長）

船山龍二（JTB社長）

■第2回目〔平成10年10月22日〕

〔開催地〕岩手県滝沢村（岩手県立大学）

〔テーマ〕環境

〔ゲスト〕浅村峻（新日鐵副社長）

川勝平太（国際日本文化研究センター教授）

瀬戸雄三（アサヒビール社長）

西澤潤一（岩手県立大学長）

矢口高雄（漫画家）

■第3回目〔平成11年10月13日〕

〔開催地〕秋田県田沢湖町（たざわこ芸術村）

〔テーマ〕情報と産業

〔ゲスト〕相原宏徳（三菱商事副社長）

大内一弘（秋田県高度技研所長）

佐々木毅（東京大学法学部長）

残間里江子（プロデューサー）

■第4回目〔平成12年10月16日〕

〔開催地〕青森県黒石市（津軽伝承工芸館）

〔テーマ〕「食料」及び「子ども」

〔ゲスト〕「食料」岡田元也（ジャスコ代表取締役）

七戸長生（北大名誉教授）

浜美枝（女優）

「子ども」河合隼雄（国際日本文化研究センター所長）

如月小春（劇作家）

■第5回目〔平成13年9月14日〕※今回から北海道知事が参加

〔開催地〕岩手県花巻温泉（佳松園）

〔テーマ〕循環型社会の形成に向けて

〔ゲスト〕三橋規宏（千葉商科大学政策情報学部教授）

山路敬三（日本テトラパック（株）会長）

山根一眞（ノンフィクション作家）

■第6回目〔平成14年8月23日〕

〔開催地〕秋田県小坂町（小坂鉱山事務所）

〔テーマ〕21世紀型の健康

〔ゲスト〕田中久敏（岩手医科大学歯学部教授）

安井信之（秋田県立脳血管研究センター所長）

吉岡利忠（青森県立保健大学副学長）

■第5回北海道・北東北知事サミット■

平成13年9月14日、花巻温泉（岩手県花巻市）において「循環型社会の形成に向けて」をテーマに開催され、次の事項が合意されました。

【合意事項】

I 循環型社会の形成に向けて

1 北東北環境フォーラムの活動を踏まえた事項

○ 経済的手法等の活用による産業廃棄物対策（北東北三県合意事項）

産業廃棄物の発生抑制を図り、リサイクルを促進するとともに県外からの産業廃棄物の流入を抑制するため、産業廃棄物税や搬入課徴金による経済的手法を活用した制度整備、搬入事前協議の義務化などに向け、共同歩調による取組みを進める。

2 新たに取組みを進める事項

(1) 水と緑を守る条例の整備への取組みと税制研究（四道県合意事項）

人と自然が共生する循環型の地域社会を形成するため、森や川、海などにかかわる環境の保全等に関する条例を各道県の特性に応じ整備するよう取り組む。

また、その目的達成のために必要な諸施策の財源確保等の見地から新税の創設が考えられないかどうかその可能性等について共同研究する。

(2) 二酸化炭素削減目標への対応（四道県合意事項）

二酸化炭素排出量及び吸収量の算定手法や削減対策の効果を検証する手法を確立するため、広域的な連携・ネットワークによる調査研究を進めるなど、二酸化炭素削減目標に向けての共同の取組みを検討する。

(3) 農業用廃プラスチック問題への対応（四道県合意事項）

農業用廃プラスチックのリサイクルを進めるため、それぞれの事例等について情報交換し、効果的な方策、回収率の向上などの諸課題にかかる取組みを共同で検討する。

(4) 食品廃棄物のリサイクル問題への対応（四道県合意事項）

食品リサイクルの効率的な実施に向けて、それぞれの事例等について情報交換し、処理体制やリサイクル手法等を検討するための場を設けるとともに、広域的な処理情報ネットワークの構築を進める。

(5) 地域資源のエネルギーとしての有効利用（四道県合意事項）

木質バイオマスなどの地域資源を活用したバイオマスエネルギーについて、研究情報の交換や成果の共有化、コスト縮減などの共通課題の解決に取り組み、有効利用を進める。

II その他の事項

1 共通した情報基盤の整備（四道県合意事項）

北東北三県と北海道の広域事務の円滑な連携が図られるよう、電子会議システムの構築等、情報の共有化に向けた基盤整備を検討する。

2 合同の北海道事務所の設置（北東北三県合意事項）

北海道事務所について、三県の相互連携による機能強化を図るため、合同事務所の早期設置に向け取組みを進める。

3 合同のソウルへの事務所機能の整備（四道県合意事項）

共同して、ソウルに事務所機能を整備するよう調査検討を進める。

4 北海道が設置しているシンガポール事務所、サハリン事務所の共同利用（四道県合意事項）

北海道が設置しているシンガポール事務所、サハリン事務所について共同利用を検討する。

5 北東北三県と北海道との連携強化を図るため、次の事項を推進する。（四道県合意事項）

(1) 津軽海峡大橋及び下北・津軽半島大橋を中心とする津軽海峡軸構想の推進

(2) 東北新幹線全線の早期開業と北海道新幹線の早期着工

6 北海道と北東北三県の子どもたちによるスポーツを通じた交流（四道県合意事項）

北海道と北東北三県の子どもたちがスポーツを通じ、交流を図るとともに、スポーツに親しむ場を提供する。

■第4回北東北知事サミット■

平成12年10月16日、津軽伝承工芸館（青森県黒石市）において「食料」、「子ども」をテーマに開催され、次の北東北食料宣言と合意事項が公表されました。

【北東北食料基地宣言】

北東北三県には、寒冷地という厳しい自然条件の下、先人の絶え間ざる努力により、幾多の苦難を乗り越えつくり上げてきた食料生産の歴史があります。

今、この地は、白神山地や奥羽山脈などの縁豊かな森林がもたらす豊富な水や広大な農地、三県を囲む太平洋や日本海に形成されている世界有数の漁場を生かして、我が国を代表する食料自給率の高い地域となっています。

地球規模での食料不足が叫ばれる21世紀を迎えるに当たり、私たちは、北東北地域・日本さらには世界の未来への架け橋として、北国のもつ共通の特性を生かし、命の糧である「健康・安全」な食料の生産拡大に努めていかなければなりません。

また、三県には、農作・豊漁などに感謝する祭りや地域色豊かな食文化など、地域の自然や歴史の中で、人々が心の支えとして大切に伝えてきた数多くの伝統・文化があり、これらを守り創造し、川の流れのごとく後世に引き継いでいくことも、我々の重要な使命であります。

この美しく、かけがえのない財産を育みながら、新たな就業者の確保や力強い農林漁業者の育成を基本に、将来にわたって、県民はもとより、国民への「健康・安全」な食料の安定供給を担う重要な地域としてさらに発展していくために、次のような取組みを実践していくことをここに宣言します。

- 1 北国という特性等を生かし、輸入食料に打ち勝てる「健康・安全」な食料供給基地づくりを強化し、我が国の食料自給率の向上に貢献します。
- 2 地球資源の有限性や環境問題の高まりなど文明の大きな転機に対応し、地域資源を有効に活用した持続的で循環的な食料生産活動を開拓します。
- 3 豊富で多様な農林水産資源を生かして、第1次から第3次産業まで幅広く「食」関連産業の育成・充実を図ります。
- 4 豊かな森と大地と海を生かして、「食」に関する体験・学習・交流の場づくりの充実や食文化の伝承・創造に努めます。

2000年10月16日

第4回北東北知事サミットにおいて

岩手県知事	増田 寛也
秋田県知事	寺田 典城
青森県知事	木村 守男

【合意事項】

I 「食料」－21世紀の日本・世界の食料に貢献する北東北－

21世紀においては、世界的な人口増加がさらに進展し、食料問題が地球規模で重要な課題となることが懸念されている。特に日本の食料自給率が大幅に低下している中で、北東北三県は豊かで恵まれた農林水産物供給力を有し、食料自給率が極めて高く、食料供給基地として貢献してきており、今後も引き続き安全でおいしい食料の供給基地として、重要な役割を担っていく必要がある。

そこで、三県が共同して、将来とも安全でおいしい食料の供給基地として発展させていく姿勢を明確にする取り組みを推進する。

- 1 北東北三県が、「食料供給基地」としての役割を担っていくための取組
 - (1) 「食料フォーラム－北東北からの発信－」の開催
北東北三県は、全国的にみて食料自給率が高いことから、日本の食料供給基地としての発展方向等をテーマに「食料フォーラム？北東北からの発信？」を開催し、全国的な発信を行う。
 - (2) 各種共同研究の実施
 - ア 産地強化につながる「小麦・大豆の高品質多収栽培技術」などの研究
北東北に広く適応可能な、高品質で多収となる小麦・大豆生産のための省力栽培技術の確立に関する共同研究や東北農業試験場等との連携を強化した小麦・大豆の新品種の育成を行う。
 - イ 漁業資源の増大をめざす「資源管理型漁業」や「つくり育てる漁業」に関する研究
北東北における重要な漁業資源であるマダラ等中規模回遊性魚類の資源管理及び栽培漁業技術に関する研究並びにヒメマス、アユ等の生産増大に向けた内水面増養殖技術開発に関する研究を行う。
 - ウ 地域食資源の機能性に関する研究
北東北に産する雑穀や豊かな山野からとれる山菜は古くから利用され、様々な加工方法で全国に提供されている。これらの地域特有の食資源には、体に良いどんな成分が含まれているのかを研究して地域食資源の良さを探求する。
 - エ 高血圧を抑制する食品の開発に関する研究
北東北の県民には、高血圧がもたらす脳卒中が多く、共通の問題となっている。このため、県民がよく食べる食材

- で血圧を抑制するものを探し、新たな食品を開発する研究を行う。
- 2 北東北の農林水産物の良さなどを三県一体として全国に発信していくための取組
- (1) インターネット活用による取組情報の受発信
インターネットを活用した特産品販売や産直施設の紹介、有機農産物等への取組情報の発信と消費サイドの要望等の受信を行う。
- (2) 大都市における特産品の通年販売コーナー等の設置
特産品の販売を促進するために、大都市のデパート等で三県共同の通年販売コーナーなどを設置する。
- 3 子供達を含む県民に対する食農教育の充実を図る運動の展開
- 食農教育に対する啓発運動の展開
学校単位や県民を対象とした食農教育（学校農園、農作業体験、地元食材提供）の取組について体験発表会を開催し、食料自給の大切さや生命を慈しむ心を育む食農教育に対する啓発運動を展開する。
- 4 北東北が連携した担い手確保・育成のための取組
- 担い手確保対策の充実
農林水産業への新規参入者受入のための共同の情報発信や受入体制整備に関する研究とともに、三県での専門雑誌への特集掲載や求人説明会の開催、情報交換会、技術研修施設等の相互の連携を進める。

II 「子ども」－輝け北東北の子どもたち－

急速に変化し多様化する社会の中で、21世紀を担う子どもたちが、創造力たくましく個性豊かに育つことが求められている。

三県に共通する美しい自然や豊かな地域文化の中で子どもたちが育つことにより、自然の美しさには素直に感動を覚える感性と喜びや悲しみなどの感受性を育み、また、地域の豊かな文化や伝統を受け継ぐことで、誇りと自信をもってふるさとを語れる人として成長することが期待される。

このため、三県の特色を活かした遊びや仲間づくり、自然体験、各種文化・芸術活動等を通じて、未来に向かって「夢」を抱ける環境づくりを推進する。

- 1 心豊かな子どもを育む施策の推進
- (1) 「子どもテレビ局」による番組制作・放送
子どもの社会活動機会を充実させるため、三県の地元ラジオ・テレビ局の協力を得て、子どもたち自らが企画、取材し出演するなどする「子どもテレビ局」（対象：小学生高学年、中学生）として番組を制作し放送する。取材対象等が地元（三県）になることから、地域に対する関心と理解を深められる。
- (2) 「子ども伝統芸能北東北大祭典」の開催
文化伝承活動を推進するため、北東北三県の古くから地域に伝わる素晴らしい伝統芸能や、民謡・手踊り・三味線といった特有の優れた文化について、日頃からこれらの伝統芸能等の習得に取り組んでいる三県の子供達の交流と発表の場として「子ども伝統芸能北東北大祭典」（対象：小学生中学生）を開催し、また、心豊かな子どもを育むとともに、併せて故郷への誇りを持たせ、地域伝統芸能を次世代に伝えていく。
- 2 たくましい子どもを育む施策の推進
- 「武道合宿」と一流選手による「模範試合実施」
スポーツに親しむ環境づくりを推進するため、柔道・剣道・相撲といった子どもたちも行っている武道等の合宿を実施する。子どもたちの交流によるライバルや仲間づくりを行うとともに、一流選手による模範試合等も実施し、子どもたちに「本物を生で見る」という感動を与える。
- 3 創造力豊かな子どもを育む施策の推進
- 「青少年科学セミナー」の開催
明日の北東北を担う子どもたちが互いの交流の中から、色々な体験学習を通じて「科学する心」を育む機会として「青少年科学セミナー」を開催する（対象：小学生、中学生、親）。ものづくりの喜びを体験する工作工房、科学の不思議を体験する実験工房、先端技術や最新科学に触れる講演会・特別展示、北東北ならではの豊かな自然環境や文化・歴史、技術・技能を学ぶ体験教室、自然観察会、講演会などの企画を多数集め、親子そろって楽しく学ぶ機会とする。

III その他の事項

- 1 産業廃棄物対策の広域的な対応
産業廃棄物の不法投棄を防止し、適正な処理を確保するため、北東北三県は、広域的な廃棄物対策を共同で進めるための方策について、検討を進める。
なお、具体的な検討については、第2回北東北知事サミットの合意に基づいて設置された「北東北環境フォーラム」の場で行う。
- 2 人事交流の実施
これまでの連携・協力を一層推進するためには、各県職員が深い相互理解のもと、強い連帯感をもって取り組むことが重要であり、相互に人事交流を行う。
- 3 北海道事務所の統合
三県の北海道事務所の統合について、検討する。

■第3回北東北知事サミット■

平成11年10月13日、たざわこ芸術村（秋田県田沢湖町）において「情報と産業」をテーマに開催され、次の事項が合意されました。

【合意事項】

情報通信技術の急速な進歩とインターネットをはじめとする情報通信ネットワークの整備により、あらゆる情報が瞬時に世界中を流れる「グローバルな高度情報社会」が到来している。

国土の約1割を占め、全国の人口の3.3%を占める北東北は、都市機能や産業拠点が分散立地しており、21世紀に向け、地域産業の発展と新分野への展開を推進していくためには、情報通信を活用したネットワーク型の産業活動の展開と、企業や大学、公的機関等の地域の人材や資源の連携、さらには広域的な地方自治体間の相互協力が不可欠となっている。

このため、次の三点を柱とする施策を推進することによって、21世紀に向けた本地域産業の発展基盤の形成を図ることとする。また、その推進母体として、「北東北産業情報化推進会議」を設置する。

1 情報化による地域産業の活性化

(1) 「みちのくバーチャル・エキスポ（夢空間博覧会2001）」（仮称）の開催

北東北連携の情報発信イベントとして、インターネットのホームページを主会場とした、三県主催によるバーチャル・エキスポを2001年度に開催する。

北東北三県の産業、学術、観光・イベント、文化、自然等地域紹介パビリオンや各種イベントの開催、物産販売のほか、市町村、企業等による独自のパビリオンの出展も募り、広く全国さらには世界に情報発信を行う。

また、これを契機として地域情報化の促進、情報産業の振興、企業情報の電子化と共有の促進、ネットワーク利用環境の向上など各種情報施策の推進を図る。

(2) 「みちのく夢ネット」（仮称）の構築

「みちのくバーチャル・エキspo」の成果物を活用し、「みちのく夢プラザ」のインターネット版となる「みちのく夢ネット」を構築する。構築に当たっては、官民の既存のコンテンツやデータベース等を最大限活用することとし、地域の紹介、産業情報、観光情報等各種データベース検索、電子ショッピング等のサービスを提供する。

2 北東北産学官ネットワークの形成

産学官連携のための仕組みづくりを検討するとともに、三県の大学、公設試験研究機関、民間企業間の情報ネットワークの構築や、研究者データベースの整備を行うことにより、産学官連携による共同研究の推進や新事業創出の促進等を図る。

3 情報通信基盤とひとづくり

(1) 情報ハイウェイの整備促進

北東北における高度情報化を推進するため、官民それぞれが目的に応じ、行政、医療、介護、教育、商取引等多様なサービスを提供する情報通信技術を活用した多様なアプリケーションの開発導入を積極的に推進し、大容量情報通信基盤整備の促進を図る。

(2) 高度情報社会に対応したひとづくり

一般向けのパソコンやインターネットの教材を北東北三県で作成するなど、全般的な情報リテラシーの向上を図るために各種施策を推進するほか、急速な技術革新に対応できる情報処理能力の高い人材を育成する。

〔その他の事項〕

1 北海道との連携強化

北東北三県と北海道との連携強化を図るため、次の事項を推進する。

(1) 津軽海峡大橋及び下北・津軽半島大橋を中心とする津軽海峡軸構想の推進

(2) 東北新幹線全線の早期開業と北海道新幹線の早期着工

2 情報化時代の雇用確保

3 広域連携のあり方の協議

なお、今回のサミットで三県が一巡したことになりますが、今後もサミットは継続することとし、青森県、岩手県、秋田県の順で開催することにしました。

■第2回北東北知事サミット■

平成10年10月22日、岩手県立大学（岩手県滝沢村）において「環境」をテーマに開催され、次の北東北環境宣言と合意事項が公表されました。

【北東北環境宣言】

私たちのふるさと・北東北は、十和田・八幡平や陸中海岸国立公園、世界遺産である白神山地などの雄大で縦豊かな自然はもとより、田園風景や森林、清流など多様な自然に恵まれています。北東北の豊かな水、山、そして光の中で、自然の恵みを受けた農林水産業などの産業活動や人々の暮らしがしっかりと大地に根づき、営々と培われてきました。

また、三内丸山遺跡などの縄文文化や、奥州藤原氏の平泉文化など、多彩で創造力あふれた文化が繰り広げられ、その風土は、今なお脈々と受け継がれています。

このような北東北の自然とそれに抱かれた私たちの暮らし、文化、風土を今一度見つめなおし、これを守り育み、次の世代に引き継いでいかなければなりません。

また、ものの豊かさや便利さに囲まれた私たちの生活を省み、自然と共に生きてきた先人たちの知恵や工夫を改めて思い起こし、今こそ一人ひとりが暮らしや産業と、環境との関わりを見つめなおし、行動しなければなりません。

私たちは、北東北が「環境」の世紀である21世紀にふさわしい地域となるよう、地域を越え、国境を越えて世界の人々と共に、新しい時代の価値観や地球的な視点を大切にしながら、世界への貢献を目指して、力を合わせて次の取組みを進めます。

- ・恵み豊かな自然環境や誇るべき文化・生活環境を守り育みます。
- ・環境保全等に重要な役割を果たしている中山間地域の維持を図ります。
- ・ゼロエミッション型社会をつくりあげていく取組みを進めます。
- ・「環境の時代」にふさわしい産業の確立に向けた取組みを進めます。
- ・地球環境問題やいわゆる環境ホルモン問題に適切に対応します。
- ・自然とのふれあいなどを通じて環境教育を充実します。
- ・多様な主体の参加のもとに、豊かな環境づくりを進めていきます。
- ・三県が、今後も連携・協力して、全国、世界に先駆けた取組みを進めていくための仕組みづくりを進めます。

1998年10月22日

第2回北東北知事サミットにおいて

青森県知事 木村 守男
秋田県知事 寺田 典城
岩手県知事 増田 寛也

【合意事項】

1 三県の連携・協力に向けた仕組みづくり

北東北三県が、豊かな環境づくりに向けて、連携・協力して先駆的な取組みを進めるための仕組みづくりを進める。

(1) 「北東北環境フォーラム（仮称）」の設置

北東北三県が、互いに情報交換を行うとともに、連携・協力して先進的な取組みを進めていくため、その中心となる組織として、「北東北環境フォーラム（仮称）」を設置する。

(2) 共同研究開発に向けた仕組みづくり

三県の試験研究機関等が、「環境」をテーマとする共同研究開発を進めるため、そのための仕組みづくりについて検討を進める。

(3) 環境情報ネットワークシステムの構築

北東北三県内の環境（河川の水質、酸性雨の状況等）に関する情報ネットワークシステムの構築に向けた検討を進める。

2 環境教育・自然とのふれあいの推進

次代を担う子どもたちが、北東北のかけがえのない自然や、環境に負荷の少ない生活を大切なものと考え、主体的に行動していくよう、三県共同で取組みを進める。また、北東北の恵み豊かな自然について、環境教育の実践やエコ・ツーリズムなどの場としての活用を図る。

(1) 「子ども環境サミット（仮称）」の開催

自然とのふれあいなどを通じて、子供たちの「環境」に対する意識の啓発と自主的な行動を促すことを目的として、「子ども環境サミット（仮称）」を開催する。

(2) 児童向け啓発冊子の作成等

三県が協力して児童向け啓発冊子を作成するとともに、その内容のデータベース化について検討を進める。また、環境に関する教材についての研究を進める。

(3) 自然とのふれあいの促進

三県が協力して、北東北の恵まれた自然を生かし、環境教育を実践していく。また、エコ・ツーリズムなどによる自然とのふれあいの場としての活用を図るとともに、積極的にPRを行う。

3 中山間地域の維持と「環境の世紀」にふさわしい産業の確立

いわゆる中山間地域は、国民的財産ともいべきさまざまな公益的機能を持っており、この機能の維持・向上を図るために、地域資源を生かした産業の振興など地域からの取組みを一層深めるほか、国としての支援体制の確立に向け国民的なコンセンサスの形成を目指すなど、三県が共同して中山間地域の活性化に取り組む。

また、「環境の世紀」にふさわしい産業の確立を目指し、三県が共同して取組みを進める。

(1) 公益的機能の保持と国民的なコンセンサスの形成

農地や森林などが持つダム機能・水源涵養の役割など、中山間地域が保持する公益的機能に関する国民的なコンセンサスの形成を目指し、三県が協力・協調して全国に向け、情報発信していく。環境と調和した農林水産業や新しい産業などについて共同で検討を進める。

(2) 環境調和型産業の振興

環境と調和した農林水産業や新しい産業などについて共同で検討を進める。

(3) 持続可能な森林経営に向けた調査・研究

森林生態系の健全性や活力を保ちながら、森林を管理・経営していく、持続可能な森林経営を目指し、三県が共同して調査・研究を行う。

(4) 多自然居住地域の形成

都市との交流の促進等による中山間地域をはじめとする地域の活性化のための仕組みづくりに向けた調査・研究を進める。

4 北東北の恵まれた自然環境の保全・創造

白神山地、八幡平、十和田湖など、全国、世界に誇りうる北東北の恵まれた自然環境を将来に向け広域的、一体的に保全・創造していくため、エコロジカルネットワークのマスタープランを策定するとともに、十和田湖の水質保全対策を進める。

※「エコロジカルネットワーク」：野生生物の保護や生態系の保全を目的とした、連続した森林区域（緑の回廊）の設定

(1) 「緑のグランドデザイン（仮称）」の策定

白神山地から十和田湖そして奥羽山系（鳥海山系も）に至る地域において、野生生物の保護のための森林の連続性の確保と生態系の保全を目的としたエコロジカルネットワーク（緑の回廊）の構築を目指し、そのマスタープランである「緑のグランドデザイン（仮称）」を策定する。

また、これに基づく必要な復元・修復を行うとともに、モニタリングを実施し、その成果を全国・世界に向け情報発信する。

(2) 十和田湖の水質保全対策の推進

十和田湖の水質保全に向け、特定環境保全公共下水道の一層の推進を図るとともに、水産資源の確保と水質の保全を共に満たすための調査研究を進める。

5 ゼロエミッション型社会の構築

ゼロエミッション型社会の構築を目指して、三県が率先して全国に先駆けた取組みを進めるとともに、広域的な廃棄物リサイクルシステムの構築を目指す。

(1) 三県の率先行動

北東北三県は、互いに協力・協調しながら、ISO 14001認証取得に向けた検討・調査、低公害車の導入、環境に配慮した施設整備、グリーン購入等、ゼロエミッション型社会の構築に向けた取組みを率先して進める。

(2) 廃棄物の再資源化・再利用の促進

廃棄物の再資源化・再利用の促進を図るため、地域の鉱山製錬所の有する技術、施設等を活用した「北東北家電リサイクルシステム」など、広域的なリサイクルシステムの構築に向けて、三県が共同して検討を進める。

6 環境ホルモン等の環境問題への対応

現在及び将来の世代のためによりよい環境を守り育てるため、地球環境やいわゆる環境ホルモン等の化学物質の問題に関して、三県が共同して調査・研究を進める。

(1) 地球環境問題に関する共同研究等

ア 酸性雨

白神山地、十和田湖、奥羽山系等広域的な森林生態系への酸性雨の影響の問題に関して、三県が協力・協調して酸性雨の広域的な実態調査を行うとともに、その影響について検討を進める。

イ フロン回収処理システム

フロン回収処理システムの構築に向け、三県共同で検討を進める。

(2) いわゆる環境ホルモン等の化学物質に関する調査・研究

いわゆる環境ホルモン等の化学物質による環境汚染の状況について、三県が協力・協調してその実態調査を行うとともに、環境や生物等に対する影響とその対策について調査・研究を行う。

■第1回北東北知事サミット■

平成9年10月29日、十和田湖遊覧船上（青森県十和田湖町）において「観光」をテーマに開催され、次の事項が合意されました。

【合意事項】

1 観光振興について

(1) アクションプランの策定

北東北の観光振興に取り組むべき施策の基本指針となるアクションプランを策定する。

(2) 新たな魅力づくり

新たな魅力づくりとして県境を越えたネットワーク化によって、三県回遊型の商品開発を行い、新しいイメージ形成と定着を図る。

(3) 冬季観光の振興

冬季観光の振興に向け、多彩な冬季観光商品を開発し「冬こそ北東北」のイメージ形成を促進する。また、交通アクセスの整備に努めることとし、具体的には、

ア 国道454号（仮称）西十和田トンネルの建設について、秋田県の協力、関係機関との協議、調整を行い、早期の事業化を検討する。

イ 主要地方道八戸大野線の整備について、本県管理分の中の交通隘路区間を順次調査し、整備を進める。

(4) 国際観光の振興

国際観光の振興に向けて、三県で「外客來訪促進計画」を策定し、国際観光テーマ地区を中心に受け入れ体制の整備を図り、海外向けのPRを強化する。

(5) 情報発信体制の強化

三県共同のホームページ開設などインターネット活用により、リアルタイムな情報発信体制を強化する。

(6) 三県共通の観光案内板設置

2 三県合同の情報発信拠点の設置について

九州福岡地区に、三県合同による観光、物産などの情報発信拠点について、早い時期の開設に向けて検討を進める。

3 広域的な交流・連携の促進について

広域的な連携・交流を推進するため「北東北広域連携構想調査」を実施し、広域連携のあり方やその推進体制等について検討を進める。

4 空港・港湾の活用について役割分担を検討する。

なお、次回は岩手県で、次に秋田県の順で開催することになりました。



The 6th Hokkaido and North Tohoku Governors Summit

北海道・北東北知事サミット

秋田県企画振興部総合政策課

T 010-8570 秋田市山王4丁目1-1

TEL 018-860-1214